藍の魅力 もっと届け

板東 亮さん（67）

板野町 → 三重県いなべ市

ブランド確立 海外も視野

工房の前で藍で染め上げた衣類や布を手に笑顔を見せる藍染体験参加者＝三重県いなべ市

本 物にこだわりたい」。江戸時代に確立された灰汁発酵建て藍染に魅せられ、移住先の三重県で2017年に藍染工房を開いた板野町出身の板東亮さん（67）＝三重県いなべ市大安。

創業から6年。菰野町にあった手狭な工房を21年にいなべ市に移転。今年3月には板東さんが設立した会社「伊勢藍JAPAN」の商標登録が認められ、地域ブランドを確立するなど活動の幅は広がり続けている。

鈴 鹿山脈から流れ出る宇賀川に沿う緑濃い森の中に新しい工房「いなべ藍ランド」はある。藍色に塗られた外壁の染め工房。染め終わった衣類や布が干されて風に揺れている。中で染め体験が行われており、時折、にぎやかな笑い声が聞こえてくる。

最初に開いた菰野町の工房からここへ移転したのは、いなべ市の地域創生事業がきっかけ。地域ブランド作りのプレゼンテーションに板東さんが応じ、藍栽培から商品開発、販売までのプランが採用された。

市の支援を得られ、工房は活動を休止していたフラワーセンターを改修して使用している。宇賀川の伏流水をくみ上げる井戸があり、発色を促す水洗に使えることもあり、本藍染には最適の場所だと板東さんは言う。

工房の染め用のかめは14個。染め液の仕立てに使う染（そ）料は徳島県から仕入れたものに加え、近年はいなべ市で有機栽培した藍から作ったものも使う。いなべ市では過去に藍作を行っていた歴史もあり、休耕地の有効利用もできる。

「農家の人の協力が得られ、有機肥料を市内で生産する場所があり、化学肥料を使わない藍栽培が可能になった」と板東さん。発色性に加え、古くから伝わる藍の薬効、抗菌性など本来の力を発揮させるには有機栽培がベストだといい、栽培から染めまで一貫した流れができた。

藍 との出合いで人生の目標ができたと語る板東さん。「工房を開いて今年で6年。今、67歳だから70歳までに何ができるか」。残り3年で何をするかのロードマップはすでに描かれている。今年、9月には神奈川県鎌倉市に藍染の体験工房と伊勢藍ブランドの商品を置く店を出店する予定だ。将来的には海外への進出も想定にあるという。

伊勢藍ブランドを立ち上げ、人が集う環境もできた。外へ出て行くことでさらにブランド力と発信力を高めるのが狙い。「本物の藍の魅力を広く知ってもらうこと」。ビジョンを明確にし、行動することで道は開けると板東さんは力を込める。「そして後継者に引き継いでいくのが役目だと思っています」。（吉本旭）

笑い声が絶えない工房で藍染を楽しむ人たち＝三重県いなべ市

地域おこし協力隊拠点 広がる交流の輪

地方創生への取り組みが全国各地で行われる中で、いなべ藍ランドの工房は人が集う場所になっている。藍染体験に訪れる人は中京圏を中心に増え続けており、働くスタッフも藍染に魅せられ、ここに来た人たちだ。

いなべ藍ランドは地域おこし協力隊の拠点施設になっている。人口約４万5000人のいなべ市では現在、25人の地域おこし協力隊員がさまざまな分野で活動する。一自治体としてはかなり多い数だ。

その一人、いなべ市の地域協力隊員の今井隼也さん（32）は東京都江戸川区出身。海外や全国を歩いて旅する中で、藍染の服を愛用した。その防臭効果に驚き、その効果を広める活動をやりたいと工房の一員となった。

客として訪れ、週に何回かスタッフとして加わるようになった落合美和子さん（41）、鈴木智恵子さん（43）も「藍の香りに包まれて、ここにいるとストレスを感じない」と口をそろえ、藍を通じて広まった交流が、さらにブランド力を高めていく原動力になっているようだ。

工房に立つ伊勢藍ＪＡＰＡＮ代表の板東亮さん＝三重県いなべ市

(C)徳島新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。